

Web公開用（抜粋）

実践からの提言 No.8 きこえない・きこえにくい中高生の言動からの考察

－交流と教育相談の取組より－

報告年度 2019 広島 報告者 椿野 絵里

1 報告内容の概要

聾学校の地域支援を通して関わった中学生や高校生（以下中高生）の言動に焦点を当てながら、その取組内容及び彼らの変容から感じたこと、支援上大切に思ったことを以下のように報告した。

(1) 交流「中高生企画（集まれ中高生）」を通して

地域支援の一環として、奈良県内に在籍する聴覚障害生徒を対象にした交流を年1回企画している。生徒と似たような経験をした社会人・大学生スタッフによる進行のもと、学校生活や勉強方法、情報保障等について話し合ってきた。参加した生徒の中には、聞こえ方や工夫してみたが上手くいかなかったこと、生活の中で感じてきたこと等、自分の気持ちを本音で話す機会がないまま思春期を迎えた生徒もいる。

（中略）

2 報告を振り返って

言語運用の視点から教育相談で関わった生徒達の言動をみていくと、進学やクラス替え等で環境が変わった時、それまでは周囲の大人に頼ってきたが、自分の聞こえ方や希望する支援を説明する必要性に迫られ、試行錯誤しながらやり取りをしていく様子が見受けられる。報告者が教育相談や交流の際に大切にしていることは、対話により聞こえ方やその状況と気持ちを「言語化」することである。地域の学校ではそのような機会を得にくい現状があるので、聾学校のセンター的機能を生かし、以下のように生徒が考え、周囲に伝えられる力をつけさせたいと思い取り組んでいる。

- どんな時に聞こえて、どんな時に聞こえにくいと感じるか。（聞こえ方の把握）
- どのような方法があるとわかりやすくなるか。（情報保障の選択）
- 誰にどうやって、どのタイミングで伝えるか。（支援の要求）

今回報告で述べたのは、上記の内容を今まで言語化する機会を持たずに思春期を迎えた生徒達が、取組によって変容していった事例の一部である。変容の背景には何があったのか。メンターの存在、仲間との出会い、周囲に伝えたい気持ち、不利な状況への気付き、聞こえる友達との関わり等、目に見えない心理的要因も絡み合い作用したと思われるが、その土台には言語運用の力が欠かせないと感じている。今後も彼ら一人ひとりと向き合いながら、対話を丁寧に積み重ね支援していきたい。